広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	コルネーユの『エディップ』について
Author(s)	村瀬，延哉
Citation	フランス文学 , 18 : 25 - 32
Issue Date	1991-06-15
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00040978
Right	
Relation	

コルネーユの『エディップ』について

村　瀬　延　哉

コルネーユの悲劇『エディップ』は1659年１月に初演された。この悲劇は，18世紀始めまできわめて好評を博した。上演回数では，『ル・シッド』，『オラース』，『シンナ』と並び，『ポリュークト』を凌いだ。作者晩年の76年に，彼の数ある作品のうちから選ばれて，ヴェルサイユ宮殿で上演の栄誉も受けている。

しかし，その後今日に至るまで，『エディップ』は上演されることも読まれることも稀な作品になってしまった。そうなったのも止むを得ないことで，現代の読者が，メロドラマがかった，複雑かつ不自然なストーリーを持つこの悲劇に関心を示さないのには道理がある。

ではどうして『エディップ』をとり上げたかと言うと，『エディップ』つまり『オイディプス王』といえば誰でも思い浮かべるソフォクレスの悲劇と比較することで，コルネーユ悲劇の特性，彼の劇に独特の世界観のようなものを明確に理解できると期待したからである。

52年に『ペルタリート』を発表してから劇作の筆を折っていたコルネーユにとって，『エディップ』は演劇界復帰の第一作となった。復帰を勧めたのは，財務卿フーケであった。彼は三つの題材を示して，コルネーユに選ばせた。彼が『エディップ』を選んだ理由の一つは，次のようなことである。

コルネーユは，59年のカーニバルの時期に間に合わせるため，２ケ月で悲劇を仕上げなければならなかった。[1] ヴォルテールの表現を借りれば，「フーケは仕立屋に洋服を，建具屋にテーブルを頼むように，２ケ月という期限をきってコルネーユに悲劇を注文した」[2] のである。コルネーユは『エディップ』なら，ソフォクレスおよびセネカという古代の大作家が悲劇を書き残しているので，それを参考にすれば比較的短時間で完成させられると判断した。

このように悲劇のテーマは，作者の内的必然性と余り関係のないところで選ばれてしまった。この結果彼は，いざ製作にとりかかった時，古代の『オイディプス王』の世界とフランス古典悲劇の世界の間に，相当大きなギャップがあるのに気づいて当惑する。

私はこの題材を子細に，それを選んだ時よりもっと時間をかけて検討した結果，戦慄を覚えずにはいられなかった（……）。遠い過去においては感嘆に値すると思われたものも，今では恐怖の念しかそそらないようにみえること，また，これら比類ない原作においては，この不幸な王が目の玉をくり抜く様が弁舌さわやかに，興味深々と語られており，最終幕を通して，顔面に血のしたたる穴の開いた眼を目の当りにする訳だが，こうしたことは我々の最も貴重な観客である御婦人達のデリカシーに著しく反するものであり，彼女達が示す嫌悪の情は当然同伴の男性諸氏の非難を招くことが，分ったからである。[3)]

作者はここで，余りにも残酷なものを見た時に，観客が反射的に示す拒否反応が，劇を損なうことを懸念している。フランス古典演劇の用語を使えば，ビアンセアンスの規則に反するのを恐れている。

しかし，コルネーユが『オイディプス王』に感じた違和感は，こうした感覚的次元だけにとどまらない。もっと深い思想的なもの，世界観の相違のようなものが存在する。

さて，アリストテレスが『詩学』を書いた時，優れた悲劇の典型として念頭にあったのが，ソフォクレスの『オイディプス王』だったことは疑いない。従って以下，彼のいう悲劇のカタルシスについて若干考察したい。

アリストテレスは，『詩学』の六章で，カタルシスを次のように定義している。

従って悲劇は一つの行動を模倣したものであり，（……）その模倣は，語りの形式によってではなく，行動する登場人物によって行われる。それはまた憐みと恐れの念をかき立てることによって，このような情念の浄化（＝カタルシス）を行う。[4)]

引用文の最後，悲劇は「憐みと恐れの念をかき立てることによって，このような情念のカタルシスを行う」とは何を意味するのか。

悲劇の観客は，主人公が思いもかけぬ悲惨な境遇に陥るのを見て，当然恐れと同情の念を感じる。この二つの感情を，悲劇は必ず観客の心に呼びさまさねばならない。しかし，観客の心の内には，既に悲劇を見る前から，この二つの感情が抑圧された形で潜んでいる。これがカタルシス理論の前提である。つまり，我々の中には，人生を生きていく過程で様々な不安や恐れが無意識の内にうっ積している。また発散されない憐みの情も存在する。卑近な例を出せば，自分や他人の不幸に思い切り涙したら，さぞかしせいせいするだろうと感じたりするのは，その証拠であろう。

ところで，我々の意識下で抑圧された，こうした恐れや憐みの情は，舞台という外部に

同じものを見て，刺激されることで，一時的に発散し消えうせる。少なくともその間数時間は，我々は穏やかな安らかな気分を味わうことができる。これが悲劇のカタルシスがもたらす効用である。

アリストテレスが，どのようにしてこの精神病理学的なカタルシスの概念を思いつくに至ったかというと，彼の父親が医者であって，彼自身も類似治療法と呼ばれる当時の治療法に通じていたことに関係があると言われている。その頃の医学では，たとえば，冷え性の人は体液中の胆汁の中に水分が多過ぎるのであって，外部からある方法で冷やすと，体内の冷えが消えてバランスのとれた状態に戻る，また熱病の患者を外部から温めて熱を下げるのも，同じ理由からだ，と考えられていた。

さらにアリストテレスは『政治学』の中で，音楽によるカタルシス療法について述べている。エンツウシアスモスという宗教的エクスタシィにとりつかれて，狂乱状態に陥った人を鎮めるには，同じように神秘的な興奮を起こさせる音楽を聞かせると良いというのである。

いずれにしろ，彼の考えに従えば，ソフォクレスの『オイディプス王』こそ，恐れと憐みの情にとらわれ易い繊細で心優しい観客の心を鎮めるのに，ふさわしい悲劇ということになるであろう。

ところで，今説明した病理学的な解釈が主流を占めるのは19世紀も中頃以降であって，コルネーユの理解したカタルシスは，これと全く異なっている。

彼は，カタルシスの作用を受けるのが恐れと憐みという二つの情念に限定されるのではなく，愛とか憎しみとかいった情念全般にまで及ぶと考えた。観客は，悲劇の主人公が，たとえば恋人を愛する余り不幸になる，あるいは野心の余り不幸になるのを見て，恐れと同情の念を覚える。そこで観客は，自分の現実生活に戻って反省する。少なくとも自分は，現実では悲劇の主人公のような不幸な目にあいたくない，だから，あんな風な過度の恋愛感情や野心は抑えなければならない，と自戒する。この過剰な愛や野心をとり除く作用が，情念のカタルシスである。

道徳主義の権化のような理論であるが，コルネーユの独創ではない。たいしてギリシア語のできなかったコルネーユは，イタリアの注釈家ベニのカタルシス解釈を，1660年に出版した『悲劇論』で採用した。

ところが，この理論を自作の『エディップ』に応用しようとする時，作者は戸惑いを隠せない。彼の信じるカタルシス理論は，不幸の原因が主人公の中にある何らかの情念に求められる場合だけ有効であって，『オイディプス王』のように主人公に何の咎もない，所謂運命の悲劇には全く意味を持たないからである。

彼は，このギリシア悲劇のどこにカタルシスがあるのか疑っている。だが，アリストテ

レスの『詩学』が絶大な権威を持つ17世紀のことだから，公然と哲学者の説を否定できない。結局，カタルシスの対象となる情念は，予言を聞いてエディップを山中に捨てさせた両親の，未来を知りたいという好奇心にあると結論した。

> エディップの劇を見て我々が恐れを抱き，その恐れが我々の内にある，咎むべきあるいは悪しき傾向を浄化（＝カタルシス）できるとすれば，恐れが浄化するのは未来を知ろうとする好奇心であろう。それはまた我々が予言に頼るのを禁じることにもなろう。予言は通常，予言された不幸を免れようと配慮することで，かえってその不幸に我々を陥らせるだけである。もしエディップの父母が，神託によってああしたことが起ると告げられ，その実現を恐れる余り子供を捨てさせなかったら，エディップが父を殺さず，母と結婚しなかったのは確実だからだ。[5)]

ギリシア悲劇の『オイディプス王』の本質を捉えるには，実に的はずれな議論であろうが，合理主義，現実主義の見地に立つなら，コルネーユの論理に反論の余地はない。そして，この合理性ないし運命の悲劇に対する無理解は，そのままストレートに戯曲≪エディップ≫の中に反映されている。

『エディップ』の主要な登場人物の一人アテナイ王のテゼは，宿命論に対し人間の自由意志を，敢然として擁護する。

> そしてデルフォイは，我々の意に反して我々の行いを操り，その予言を世にも奇怪な形で実現させるのか？それでは魂は全く奴隷のようなものではないか。天上の法がそれを休みなく善へ悪へと駆り立てるのだから。（……）王を虐殺しようと，祭壇を破壊しようと神々の誤ちで，人間の誤ちではない。この地上に広く存在する美徳の本当の誉れはこれら神々のものだから，名誉とてすべて借りものにすぎない。自分で行動していると思っても，実は神々が我々の内で動いているだけだ。熟慮決定する時でも，実際は服従しているだけだ。そして我々の意志が愛したり憎んだり，求めたり避けたりするのも，天上から神々の手がそれをけしかけているからにすぎない。どうか私がこのような理性の盲目状態を免れますように。罰するにも報いるにも公平な神なら，助力を与えた後は我々のなすに任した上で，各々の行為に罰や報賞を下すはずだ。[6)]

今引用したテゼの台詞は，古代の宿命論に対する反論であると同時に，同時代のジャンセニスムに対する反論にもなっている。1656年から57年にかけてパスカルの『プロヴァン

シアル』が出版されるなど，『エディップ』執筆当時ジェズイットとジャンセニストの対立は緊張の度を増していた。コルネーユが，どれほど正確にジャンセニスムの神学を理解していたかは別にして，彼はモリニスムの立場から自由意志を擁護した。

ヴォルテールは，テゼの台詞について次のように述べている。

> この件が戯曲の成功に大いに貢献した。自由意志についての論争が，その頃人々を騒がしていた。テゼのこの長台詞はそれだけでも美しいものであるが，当時の論争によって新たな価値を獲得した。何人もの愛好家が，今なおこの台詞を空で暗記している。[7)]

しかし，『エディップ』の劇で自由意志を称え，そこに人間の尊厳を見い出すのは，テゼだけではない。宿命に打ちのめされ，屈辱と悲惨のどん底に突き落とされたはずの主人公自身が，そうするのである。自分の自由意志で行った行為になんらやましい点はないと，エディップは断言する。罪はすべて，神々の差金によってひきおこされたのだ。

> 私の思い出には，立派な手柄しか浮かんでこない。ヘラクレスの足跡にならい，至る所で法を守り，怪物を倒し，悪人を罰しようとしただけだった。しかしその結果今見い出す自分は，親殺しで母親と通じた男なのだ。私の意に反して，天が罪を犯すよう私に命じているのだ。[8)]

エディップは自分の素性を知る以前，己れが逆境にうちのめされない，理性的で意志堅固な人間だと信じていた。

> だが私は，常に自分の運命の支配者だった。[9)]

そして，彼の罪が明らかになった後も，一時の動揺をのりこえて再び運命の支配者に戻る。彼は，それまで反対していたテゼとディルセの結婚を認め，息子達の今後をテゼに依頼する。このように後顧の憂を断った後，エディップは彼自身が名誉ある行いとみなしているもの，つまり荒廃したテーバイの町を救うために，自らの血を流す。だから，エディップの犠牲的行為が行われた時，かっての敵対者であったディルセが，彼を称えてこう言う。

> そうすることで，彼は自分自身の運命の支配者になったのです。[10)]

エディップを形容するに二度までも用いられた「運命の支配者」という表現は，これが古代ギリシアの宿命劇から題材をとった悲劇であることを考えると，実に印象的で，皮肉な感じがする。

さらに，テゼ同様自由意志の信奉者であるエディップは，自分の犯した大罪の本当の責任が神々にあるという見解を，最後まで捨てない。従って，己れの目の玉をくり抜くという残酷な行為も，テーバイを救うための犠牲儀礼にとどまらない。不正なる神々への挑戦の意味がこめられている。

> 天がこのような残酷な行いをしたからには，もはや天を仰ぎ見ないようにしよう。その光を軽蔑し，復讐してやるのだ。我々の目がそれを見るのを拒もう。そして今しばらく生き延びて，すべての人に，天の暴虐非道がいかなるものかを伝えねばならない。[11)]

以上，ビアンセアンスの規則，カタルシスの解釈，モリニスト的なテゼの台詞などを通して，コルネーユの『エディップ』とソフォクレスの悲劇の違いを明らかにしてきた。

既に述べた通り，アリストテレスのカタルシスの解釈について，コルネーユは随分頭を悩ましたようだが，彼が当惑したのも当然である。アリストテレスのカタルシスは，彼の知っていたギリシア悲劇を念頭においたもので，『オイディプス王』などには見事にあてはまっても，他の時代のあらゆる悲劇に適用できるか疑問だからだ。

コルネーユの悲劇の多くが，我々が一般に理解している意味での悲劇性に乏しいのは明らかであり，『ル・シッド』にしろ『シンナ』にしろ，結末はハッピー・エンドである。おそらくアリストテレスが言うようなカタルシスは，どこにも見当たらない。これらの悲劇は，いずれも人間の理性と意志の勝利を高らかに歌い上げており，その傾向は『エディップ』にまで及んでいる。

たとえようもない恥辱の淵に沈んでも，エディップは，自分の力の及ばない外部の出来事には動かされないようにし，彼の力が及ぶもの，つまり彼の理性と意志を最大限に駆使して，窮地に対応しようとする。そして，この自由意志の行使の中にこそ，彼は，人間の尊厳を見い出す。

コルネーユの『エディップ』は，自由意志の尊重と反宿命主義という観点に限るなら，ソフォクレスの悲劇と正反対の立場に立つと言わざるをえない。

註

1) Cf. Au Lecteur d'*Œdipe*.

2) 《Il semble que Fouquet ait commandé à Corneille une tragédie pour lui être rendue dans deux mois, comme on commande un habit à un tailleur, ou une table à un menuisier.》
(VOLTAIRE, *Commentaires sur Corneille* III, dans *Œuvres complètes*, v. 55, The Voltaire Foundation, 1975, p. 800.)

3) 《(...), je n'ai pas laissé que de trembler quand je l'ai envisagé de près, et un peu plus à loisir que je n'avais fait en le choisissant. J'ai connu que ce qui avait passé pour miraculeux dans ces siècles éloignés pourrait sembler horrible au nôtre, et que cette éloquente et curieuse description de la manière dont ce malheureux prince se crève les yeux, et le spectacle de ces mêmes yeux crevés dont le sang lui distille sur le visage, qui occupe tout le cinquième acte chez ces incomparables originaux, ferait soulever la délicatesse de nos dames, qui composent la plus belle partie de notre auditoire, et dont le dégoût attire aisément la censure de ceux qui les accompagnent;》
(Au Lecteur d'*Œdipe*)

4) 《Donc la tragédie est l'imitation d'une action (...), imitation qui est faite par des personnages en action et non au moyen d'un récit, et qui, suscitant pitié et crainte, opère la purgation propre à pareilles émotions.》
(ARISTOTE, *Poétique*, texte traduit par J. HARDY, Les Belles Lettres, 1969, pp. 36–37.)

5) 《Si sa représentation nous peut imprimer quelque crainte et que cette crainte soit capable de purger en nous quelque inclination blâmable ou vicieuse, elle y purgera la curiosité de savoir l'avenir, et nous empêchera d'avoir recours à des prédictions, qui ne servent d'ordinaire qu'à nous faire choir dans le malheur qu'on nous prédit par les soins mêmes que nous prenons de l'éviter, puisqu'il est certain qu'il n'eût jamais tué son père ni épousé sa mère, si son père et sa mère, à qui l'oracle avait prédit que cela arriverait, ne l'eussent fait exposer de peur qu'il n'arrivât.》
(CORNEILLE, *Œuvres Complètes*, Seuil, 1963, p. 832.)

6) 《(...), Et Delphes, malgré nous, conduit nos actions / Au plus bizarre effet de ses prédictions? / L'âme est donc toute esclave: une loi souveraine / Vers le bien ou le mal incessamment l'entraîne, (...) / Qu'on massacre les rois, qu'on brise les autels, / C'est la faute des dieux, et non pas des mortels. / De toute la vertu sur la terre épandue, / Tout le prix à ces dieux, toute la gloire est due; / Ils agissent en nous quand nous pensons agir; / Alors qu'on délibère on ne fait qu'obéir; / Et notre volonté n'aime, hait, cherche, évite, / Que suivant que d'en haut leur bras la précipite. / D'un tel aveuglement daignez me dispenser. / Le ciel, juste à punir, juste à récompenser, / Pour rendre aux actions leur peine ou leur salaire, / Doit nous offrir son aide, et puis nous laisser faire.》
(*Œdipe*, III, 5, 1151–1154, 1159–1170.)

7) 《Ce morceau contribua beaucoup au succès de la pièce. Les disputes sur le libre arbitre agitaient alors les esprits. Cette tirade de Thésée, belle par elle-même, acquit un nouveau prix par les querelles du temps, et plus d'un amateur la sait encore par cœur.》
(VOLTAIRE, *op. cit.*, p. 813.)

8) 《Mon souvenir n'est plein que d'exploits généreux, / Cependant je me trouve inceste et parricide, / Sans avoir fait un pas que sur les pas d'Alcide, / Ni recherché partout que lois à maintenir, / Que monstres à détruire et méchants à punir. / Aux crimes malgré moi l'ordre du ciel m'attache:》
(*Œdipe*, V, 5, 1820–1825.)

9) 《Mais je me fis toujours maître de ma fortune,》
(*Ibid.*, V, 2, 1718.)

10) 《Il s'est rendu par là maître de tout son sort.》
(*Ibid.*, V, 9, 1975.)

11) 《Ne voyons plus le ciel après sa cruauté, / Pour nous venger de lui dédaignons sa clarté, / Refusons-lui nos yeux, et gardons quelque vie / Qui montre encore à tous quelle est sa tyrannie.》
(*Ibid.*, V, 9, 1991–1994.)